

魔法使いといと黒猫のウイ
ズ 黄 昏 夢 を 殺 す 者 外 伝

烏零

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

久々に投稿します。

メアレスⅢの前ぐらいの時期です

目次

子供たちのヒーロー

1

子供たちのヒーロー

「……はああっ！」

黄昏に包まれた都市。その人気の無い路地裏で、異形と異形がぶつかり合っていた。片方は丸みを帯び、小さな手を持つ宙に浮く明らかにまともではない生き物、もう一つは——子供と思える小さな体に、明らかに不釣り合いな異常に大きな手を持つ少年だった。

「喰らえ！ 《巨大な手—ジヤイアント・フィスト》！」

叫びとともに、少年がその手を振り下ろす。それは大きさから想像もできない速さで繰り出され、怪物を勢いよく押しつぶす。怪物はその一撃で体を崩壊させ、光の粒となって消えた。それを確認してから、男の手が泥のように溶け、手が元の大きさに戻る。一息つき、腰を下ろそうとしたところで何か別の気配を感じ、すぐさまその場から離れる。遠くの家の天井に身を隠し、先ほどまで異形と戦っていた地点を見る。

「……また、やられてるの。これで何件目？」

「さあな。だが仕事の手間が省けるのはいいことだろう」

「こちとら商売あがったりだがな」

耳を澄ませ会話を聞く。どうやら自分が奴らを始末していることはわかっていないらしい。足早にその場を離れ、街の端の方にある路地へと帰る。ここは人が少ない……いや、人はいる。だが、そのだれもがみすぼらしく、ボロボロの服を着ていたりするひとばかりだった。ここには、身寄りのない子供が集まり、なんとかしてその日その日を生きている。そんな場所だった。

少年は路地を歩く。目的地は決まっていた。路地の奥に、段ボールで囲まれた小さな家があった。男が扉をノックすると、中から5人の子供が飛んでくる。

「おかえりヨウにーちゃん！仕事は終わったの？」

「ああ。ばっちりだ」

ヨウと呼ばれた少年は、笑顔で答える。子供たちは、次々にヨウを称えた。この子供たちは、この街に存在する敵——ロストメアと呼ばれる存在と戦う、メアレスという戦士たちに憧れていた。ヨウは、そんなロストメアと戦う戦士の一人、メアレスだ。

ヨウは、ロストメアと戦い魔力を集める傍ら、身寄りのない子供たちを集め、養い、育てていた。ヨウ自身、いつからこの力に目覚めたか覚えていない。だが、それでいいと思つた。……子供たちを助けることが出来る、何より、ロストメアと戦うことが出来る。それさえあれば、何もいらな思つていた。

子供たちとの夕食を終え、夜風に当たる。暮らしは裕福ではないものの、家族同然の子供たちとの暮らしは暖かく、平穏で幸せだった。……最近、妙な連中に追われ始めている。もしも、あれがロストメアなら、あれとも戦わなければ。この生活を脅かすなら、その脅威を排除しなければ——